

# 2012年イカ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	漁獲		産地					輸入			輸出イカ
	スルメイカ	アカイカ	スルメイカ			アカイカ		マツイカ	コウイカ	調製品イカ	
			生	冷近	冷遠	生	冷				
23	242.3	14.5	83.5	38.4	1.3	0.0	10.6	73.9	16.0	48.3	39.9
24	166.4	5.7	70.4	33.8	1.6	0.0	7.1	75.1	16.2	41.6	28.9
%	69	39	84	88	122	60	67	102	101	86	72

年	東京		在庫量				消費支出 生(生)イカ	加工品				
	スルメイカ		スルメイカ	コウイカ	その他	イカ製品		イカ塩辛	干スルメ	燻製	缶詰	
	生	冷										冷
23	11.5	4.1	0.3	33.2	5.0	24.1	2,469	34.18	20.23	7.20	10.16	1.32
24	10.0	4.7	0.2	36.7	4.6	27.9	2,336	31.31	19.67	7.4	9.031	
%	87	113	93	111	93	116	95	92	97	103	89	0

年	産地		輸		輸出イカ	東京		消費支出 生(円)イカ				
	スルメイカ		アカイカ			スルメイカ	コウイカ					
	生	冷近	冷遠	生					冷			
23	205	269	246	108	249	405	757	197	426	396	687	2,374
24	202	262	224	214	229	418	844	219	429	363	744	2,288
%	99	97	91	198	92	103	111	111	101	92	108	96

## スルメイカの資源

平成年代に入って日本近海のスルメイカの漁獲は、平成10年を除くとかなり安定的に推移しており、20～40万トン台の高い数字を記録しているが、本年は生・冷ともやや不振で16.6万トンであった。

太平洋側の漁獲の殆どを占める冬生まれ群（冬季発生系群）の資源量は、1981～1988年の間は30万トン以下の低い水準で推移していたが1989年以降増加に転じ、1996年には133.4万トンにまで増加した。その後は大きく変動する年はあるものの、概ね80万～120万トンの高い水準で推移した。調査船調査結果から推定した2012年の資源量は81.7万トンであった。親魚尾数は資源量と同様に1980年代後半から増加傾向を示し、1993年には15億尾に達した。2012年級を産んだ親魚尾数は12.7億尾であった。資源水準は過去34年間の資源量の推移から中位、動向は2008～2012年の5年間の変化から減少と判断されている。

秋生まれ群（秋季発生系群）の資源量は、1980年代は主に50万トン前後（1981～1989年の資源量の平均値は51.2万トン＝低位水準と中位水準の境界値）であった。しかし、1980年代後半以降は増加傾向となり、1990年代の平均資源量は109万トン（中位水準と高位水準の境界値）、2000年前後には主に150万～200万トンとなった。2004～2007年は100万トン前後に減少したが、2008年以降の資源量は概ね120万～170万トンの水準（2012年は141万トン）にある。漁獲割合は、1980年代半ばは30%以上であったが、1990年代は30%以下であった。2000年以降は20%前後に減少し、2011年は9.5%となった、といわれている。

## 産地水揚量と価格

24年の日本近海のスルメイカ水揚量（継続漁港）は生7万トン（前年：8.4万トン）、冷万3.4トン（前年：3.8万トン）と生鮮・冷凍とも減少した。

TACに基づく漁業種類別漁獲量はトロール2.3万トン（前年：4.4万トン）、まき網1.17万トン（前年：1.12万トン）、釣りの冷凍3.4万トン（前年：4万トン）であったが、釣りが減少、トロールかなり減少、まき網は前年並み、中型船凍船減少であった。

冷凍は、本年も昨年同様当初北陸船団が日本海スルメイカ主体の操業をし、青森、北海道、岩手船団がアカイカ（ムラサキイカ）操業であった。しかし、1次航海は過去にない不漁であった前年を上回りやや好調であった。また年明け後に操業する三陸沖のアカイカ漁は近年好漁で推移してきたが、本年は皆無状態で極めて低調であった。この結果アカイカの水揚げは前年を下回り、近年でも最低の水準であった。また、秋から冬場の漁も前年同様ほぼ皆無であった。

生スルメイカの海域別漁獲量は、日本海5,482トン（前年：19,905トン）、太平洋57,245トン（前年：87,082トン）、オホーツク1,610トン（前年：9,509トン）で、本年は太平洋・日本海・オホーツクとも減少したのが特徴である。また九州北部での漁獲は5,836トンで前年（7,396トン）を九州でも下回った。

本年も中型船凍船は、当初スルメイカとアカイカ操業とに分かれたが、秋口に昨年は初めてオホーツクに出漁したが、本年も操業したが海況の影響もあって昨年ほどの漁獲にはならなかった。

また本年も業界では、従来からスルメイカー極集中の排除、三極漁場の選択的移動、漁獲努力量の分散、急速凍結によるブロック製品の品質向上等付加価値の高い魚種や製品作りの奨励、サイズ選択、IQFの促進等は定着している。

産地価格は、生鮮202円（前年：205円）、冷凍は262円（前年：269円）となり生鮮・冷凍もやや下落したが、冷凍を始め本年も比較的堅調市況であった。

本年の特徴は、①本年の冷凍スルメイカは水揚げも減少したが、IQF生産も前年を下回った、②本年のイカ類の魚価は当初在庫が多かったこともあり、上半期は軟調推移であったが、夏以降国内漁が生・冷生産も思うような量とならずし、下半期は堅調相場に変わった、③本年の冷凍スルメイカ（R）のサイズ組成は、21～25尾サイズが33%で前年（17%）を大きく上回り、26～30サイズも25%で前年（34%）を上回った。サイズ組成も20尾以下の大型は25%で前年（6%）より大きく増加し、大型化が顕著であった、④AR、FORの漁場がなくなり、ペルー水域、NZ、ロシア等になり海外イカ類の漁場は許可問題等もあり操業がかなり狭まっている事情に変化はない、こと等である。

## 在庫量

24年は23年末の生イカの豊漁で在庫が嵩み、昨年同期より一万トン近い4.9万トンの在庫から始まり、本年も例年通り6、7月に最低になったが、その数量は2万トン越えとなり、昨年、一昨年を上回る数量であった。その後、8月以降は例年どおり増加に向かった。しかし秋口以降のオホーツクや羅臼沿岸で漁も前年程でなかったことや、本州での水揚げも前年を下回ったことで、越年在庫は3.8万トンと昨年を一万トン下回る在庫となった。平均在庫量は、上半期の多さを反映し3.8万トンで、引続き前年（3.3万トン）をやや上回った。

## 消費地入荷量と価格

スルメイカの東京消費地入荷量は、生1万トン（前年：1.2万トン）、冷凍4.7千トン（前年：4.1千トン）であった。本年は近海の生イカ漁が不振であったため生鮮の入荷が前年を下回ったが、逆に冷凍は代替需要もあって増加した。価格は、生429円（前年：426円）、冷363円（前年：396円）で生鮮・冷凍とも横ばい推移であった。

消費支出でみると購入数量、購入金額とも今年も前年を下回った。

## NZイカ

23年のNZイカ釣漁は、本年は2隻、1.8千トンで前年（2隻、1.2千トン）を引き続き上回った。

産地水揚量（全漁連）は、1,608トンで前年（1,320トン）をやや上回った。

価格は224円で前年（246円）をやや上回った。

## アカイカ

本年は昨年以上の初漁期にはまとまった漁で期待されたが、秋から冬にかけての漁は昨年同様極めて低調で漁皆無であった。ただ年明け後の三陸近海での漁は、凶漁で漁獲皆無であった。また昨年は沖合（東経170度以東水域）での漁は震災の影響で出漁はなかったが、2012年は22隻-1,504トンの漁獲をみた。小型船による近海での漁獲は昨年の5トンと変わりなく極端に少ない7トンの水揚げに終わった。

全漁連集計によると、生7トン（前年：5トン）、冷2,731トン（前年：4,288トン）であった。

産地価格は、生826円（前年：115円）、冷332円（前年：407円）であった。

海外アカイカは、ペルー200海里内の操業許可がおりず、公海漁場のみでの操業となったが、4隻-1.448千トンで、昨年実績（4隻-9.97千トン）を引続き大きく下回った。

本年のペルーアカイカの耳とりのサイズアソートは5尾以下が82%（昨年は5尾以下99%）と大半を占めてはいるが、6/10、11/15サイズが、15%と最近になく大型サイズが多かったのが特徴。

産地水揚量（全漁連）は、4,315トンで前年（6,291トン）をかなり下回った。

価格は163円で前年（141円）をやや上回った。

## 輸 出 入

24年の輸入イカ（コウイカを除く）は、中国主体に7.5万トンほぼ前年（7.4万トン）並みであった。

価格は、418円と前年（405円）を若干上回った。

冷凍イカの主要輸入国は、中国33,840トン（前年：33,666トン）、ペルー8,468トン（前年：11,216トン）、チリ7,908トン（前年：3,766トン）、タイ6,879トン（前年：7,701トン）、ベトナム5,123トン（前年：5,000トン）、米国5,064トン（前年5,813トン）、インド1,418トン（前年：1,697トン）、フィリピン1,248トン（前年：950トン）、アルゼンチン622トン（前年：558トン）、NZ472トン（前年：270トン）で前年同様中国のシェアが高かったが、今年はチリからの搬入が目立って多く、ペルーの減少が顕著であったのが特徴。

24年の輸出は、2.9万トンで前年（4万トン）をかなり下回ったが、本年は中国（1.1万トン）、

ベトナム(1万トン)の依然両国で2/3を占めている。

### モンゴイカ

24年のコウイカの輸入は、1.6万トンで前年（1.6万トン）並みであった。

輸入価格も、844円で輸入量の減少もあって引続き前年（757円）を上回った。

東京消費地入荷量は、0.2千トンで前年（0.3千トン）をやや下回り引続き漸減傾向が続いた。

価格は、744円でほぼ輸入価格の傾向と同じで前年（687円）を上回った。